

文部科学省 教員の養成・採用・研修の一体的改革推進事業

委託事業成果報告書

(平成29年度)

札幌市教育委員会

市立高校外部の専門人材活用推進委員会

目 次

I 調査研究事業の概要

- 1 本研究の概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1
- 2 市立高校外部の専門人材活用推進委員会の会議概要・・・・・・・・ 3

II 今年度の調査研究の具体的取組

- 1 市立高校コンシェルジュの取組とその普及・・・・・・・・ 14
- 2 市立高校コンシェルジュの支援による学社融合講座・・・・・・・・ 22
- 3 IB公式ワークショップ運営マニュアルと外部支援員活用の効果・・・・・・・・ 27
- 4 札幌ラウンドテーブルへの外部支援員の配置と運営マニュアルの作成・・・・・・・・ 30
- 5 外国人講師に対するメンターによる支援及びF A Qの作成・・・・・・・・ 35
- 6 「教室で使えるグループワーク」を活用した研究協議会・・・・・・・・ 40

III 調査研究のまとめ・・・・・・・・・・・・・・・・ 44

I 推進事業の概要

1 本研究の概要

(1) 本研究の目的

本研究においては、高等学校において外部の専門人材を登用する際に学校と人材を接続する役割を担うコンシェルジュの活用により、人材の発掘や学校と人材をつなぐノウハウなどを蓄積し、運用マニュアルに反映させることにより普及を図るとともに、特別免許状授与者（予定者を含む）が学校教育に関わる環境及び自身の生活環境において抱える問題等を解決するためのFAQの作成やメンターによる支援の在り方について研究することを目的とした。

(2) 本研究の期間

平成29年6月1日から平成30年3月30日まで

(3) 本研究の体制

調査研究の内容について協議するための組織として、「市立高校外部の専門人材活用推進委員会」を設置するとともに、当該委員会を運営するための事務局を教育委員会内に設けた。また、同推進委員会の中には、今年度のテーマである「専門人材の活用促進を担う組織による人材活用ノウハウの普及及び特別免許状授与者等の環境整備」についての実践者である札幌市立高校コンシェルジュを委員に加えることとした。（推進委員一覧は、次頁参照）

(4) 調査研究の対象とする取組

- ・国際バカロレア機構（IBO）主催のIB公式ワークショップ（札幌開成中等教育学校）
- ・札幌ラウンドテーブルの取組
- ・学社融合講座（札幌大通高校）
- ・特別免許取得に向けた研修（札幌開成中等教育学校）

(5) 調査研究の日程

事業項目	実 施 日 程											
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
調査研究準備												
①推進委員会				第1回				第2回			第3回	
②各項目の取組												

2 市立高校外部の専門人材活用推進委員会の会議概要

平成 29 年度 第 1 回市立高校外部の専門人材活用推進委員会 議事録

日 時	平成 29 年 7 月 26 日（水）10:00～12:10
場 所	札幌開成中等教育学校 会議室 1
参加者	相沢副委員長、西野委員、松田委員、岩本委員、富田委員、 小林係長、幸丸係長

1. 開会

2. 委員長挨拶（相沢副委員長）

3. 委員自己紹介

4. 委員会設立の趣旨および今後の業務の流れの説明

（1）事業の進め方（配布資料参照）

- 本年度の委員会は昨年同様 4 回の実施予定している。
- 学校と専門人材をつなぐコーディネート機能をもったコンシェルジュを今年配置したが、その取組によるノウハウの蓄積と普及、特別免許状授与等優秀な人材を継続して確保していくための FAQ 作成やメンターによる支援について研究していきたい。

5. 議題

（1）昨年度の調査研究結果の確認

- 昨年度実施した調査研究では、四つのワーキンググループ会議を定期的で開催し、成果を上げることができた。
- 中でも、今年度から実際に本市で導入に至ったコンシェルジュ配置につながる研究ができたことは大きな成果であり、現在すでに稼働している。この結果は、今年度策定した市立高校教育改革方針の重要項目にも位置付けることができた。
- I B ワークショップ等の運営においても、外部の支援者を活用した運営についてまとめ、結果として、ワークショップ運営マニュアルを作成することができた。これをさらにバージョンアップしたものにはできないかと考えている。
- また、教員の資質向上及び授業改善のための「教室でできるグループワーク」の小冊子を作成することができ、市立学校各校に配布し、授業の場面で活用してもらうよう投げ掛けている。

（２）今年度の調査研究の具体的な目的と内容についての説明（事務局）

①調査研究の目的

- 学校の教育力向上につながる外部の専門人材活用は、人材の発掘とともに、その連携の在り方、つながり方などが重要であり、その接続役となる市立高校コンシェルジュの活用によって得られるノウハウや外部と接続する際に注意すべき事項、課題などを蓄積し、それを少しずつ学校が担えるようにしていく必要がある。
- 外部人材の活用場面では、担当する教員の負担軽減も考えなければならないが、そのためにも外部との接続マニュアルのようなものが必要であり、それを普及していくことが重要であると思われる。
- 今年度の人材活用場面は四つを想定している。まずは、教員研修としての大通高校を会場に行うラウンドテーブルの活用及びIB公式ワークショップ、IBのための特別免許授与者やその候補者となるグローバル人材育成推進員（GEA）の採用に係る手続き、外部の地域人材を活用し市民と高校生が共に学ぶ学社融合講座としている。これらの実践で得られる課題等についてまとめ、さらには、人材活用のための準備や手続きなどのノウハウを蓄積することとした。
- さらには、外国籍の優秀な人材などが、生活場面やその他、日本の教育環境への適応についての困難などを解消し、安心して活動できる環境整備として、FAQの作成やメンターによる支援についての具体的な検討を行うこととした。
- これらについて、委員の皆さんから様々なアドバイスをいただきながら今年度の研究を進めていきたい。
- また、毎年、市立高校の教員を対象として開催している進路探究学習研究協議会にて、講師をお願いしている方に、昨年度の調査研究で作成した「教室でできるグループワーク」の小冊子を用いてもらい、その効果を検証したいと考えている。

（３）今年度の調査研究についての協議

- まず、ラウンドテーブルについてだが、札幌で開催するのは今年で３回目であり、道外の教員や大学関係者も多く参加するなど年々拡大している。
- 現在は、大通高校を中心に開催している内容だが、どの学校でも実施は可能だと考えられる。将来的には、市立高校各校から中心なる教員が参画した取組になるとよい。そのためにも実施に係るノウハウを蓄積し、共有することにより普及啓発していく必要があると考えている。
- 外部の人材の参加・協力は欠かせない取組であり、校内の受付、渉外調整担当など一部の教員に多大な負担が生じている。現状では、窓口となる立場を教員が担っているため、業務にも多少の支障をきたしている。
- 今年度のラウンドテーブルでは、テーマを「貧困」と「地域連携」の二つとした。
- 参加申込などの受付や当日の運営、そして外部から参加など、教員以外の協力も得ながら何とか実施できているが、企画・運営ともにさらに改善する方策はないかと感じている。

- 市立高校コンシェルジュについては、現在稼働し始めているものの、学校現場での認識、さらには積極的に活用されている実感が今一つといった状況である。
- 教員によっては、クラスに困り感のある生徒を抱えるなど、日常の業務に負担を感じながら日々対応に当たっているため、コンシェルジュにつながることにに対して難しさを感じているものもあるようだ。
- それぞれの学校で、校内にコンシェルジュのような役割を担う人が常駐することができれば、さらによいと感じている。
- 現在、コンシェルジュも新しく配置されたことによる動きづらさがあるように思われ、学校との意見交換をさらに行いながら活動する必要があるのではないだろうか。
- まずは、学校に対し、コンシェルジュの顔が見えるようにしていくことが必要であり、10年一括りのスパンでその在り方を考えていくとよいのではないかと考えている。
- 将来的には、現在、コンシェルジュに期待されている役割を学校が独自に担えるようになり、また新たなニーズに対応できるようになっていくことに結び付け、教員の質の向上を図ることが出来れば、この取組が大きな意味合いをもつことになる。
- 現在の学校は、外部に協力を依頼することを得意としていないように思われる。外部とつながったり、何かを依頼することは大変なことだと考えているようだ。
- 外部に依頼し協力してもらうことによって、負担が減るとともに効果を実感できるといった経験が必要である。
- ただし、外部の方との連携では、活用後の報告などが必須であるにもかかわらず、その部分ができていない教員もいる。
- 外部人材との連携の仕方を間違えないようにしなければならないと同時に、その成果を自分や自校のものに止めず他校などと共有していくようにすべきである。
- 例えば、生徒の体験などを実践する場面で、受入先に協力をしてもらった場合、その受入先への成果のフィードバックは誰がやるかということや、接続後のフォローについても必要なノウハウがしっかりと蓄積されることが大切。
- 外部の協力は、winwinの関係性が成立しないと長続きしない。
- 取組の結果得られる成果を協力者にフィードバックし、さらに教員の働き方改善の視点からも負担軽減ができる方向性で考えていくとよいのではないだろうか。
- 特別免許取得者やGEAといった外国籍の教員等へのFAQの作成やメンターによる支援については、すでに採用になり教壇に立っている方がこれまでどんな困りを抱えてきたかなどについてヒアリングして把握する必要がある。
- 現在、自ら外国人教師であり、彼らと最も身近な立場にいるディクセット委員が本日は残念ながら欠席しているが、今後は、ディクセット委員から外国籍の先生方へのヒアリングを行ってもらい、その結果からどのような支援方策が考えられるかを検討していきたい。
- 次回の会議では、その概要をお伝えできればと考えている。

- どの取組も各学校に勤務する教員に対する情報伝達が重要であるように思われる。
- 様々な場面で有効とされる取組もなかなか情報として伝わっていないことが懸念される。
- 今年度のコンシェルジュも稼動した当初は教員の間で周知されるのに時間がかかっていた。

6. その他（連絡）

（１）ラウンドテーブルの参加者アンケートについて意見があれば事前にメールにて伝達を願う。

（２）次回の委員会日程について

次回委員会までにディクセット委員との連絡をとり、外国籍教員へのヒアリング等について実施を予定。

7. 閉会

以上

平成 29 年度 第 2 回市立高校外部の専門人材活用推進委員会 議事録

日 時	平成 29 年 11 月 15 日（水）10:00～12:00
場 所	札幌開成中等教育学校 会議室 1
参加者	相沢副委員長、西野委員、岩本委員、富田委員、ディクセット委員 小林係長、幸丸係長

1. 開会

2. 委員長挨拶（相沢副委員長）

3. 調査研究に係る取組の実施状況及び今後について

（1）事業の進捗状況報告と今後に向けた協議

- 本年度の調査研究は、大通高校を会場として教員の研修する機会として開催したラウンドテーブル、開成中等教育学校の IB ワークショップの活用、外国籍の特別免許取得者及びその候補者であるグローバル人材育成推進員（GEA）の抱える困りへの支援を目的とした FAQ の作成並びに日本でも経験値の高いメンターによるサポートを計画にあげている。
- これまでの期間で、大通高校が主体となって開催したラウンドテーブルによる研修と開成中等教育学校の IB 公式ワークショップが終了し、今後進める研究内容としては、FAQ の作成とメンターによる支援の在り方に取りかかりたいと考えている。
- まず、ラウンドテーブルの状況について、実行委員として直接関わっていただいた大通高校の西野委員から簡単に説明いただきたい。
- ラウンドテーブルは、今年度で 3 回目の開催となっている。昨年度は、新たな取組として、生徒が企画に参画しながら、高校生、教員、社会人が参加する形で実施することができ、とても良い機会になったが、多少負担が大きかったように感じる。
- 本研究の内容に示されている運営マニュアル等の作成により、教員に運営準備の段階で生じる負担を軽減しながら、研修成果を高めることが望まれる。
- 今年度の運営では、大学生 4 名に支援者として協力してもらうことで、運営に係る教員の負担を減らすことを計画した。しかしながら、ラウンドテーブルの性質から外部の参加候補者の選定や外部との連携などの場面において、大学生では限界があることが分かった。
- ラウンドテーブルは、参加者の確保と参加者を複数のグループとしてマッチングすることがその内容に大きく影響するが、根幹に当たるその部分が、今回協力してもらった大学生は非常に有能な方であったにも拘わらず難しかったと実感している。
- 結果として、大通高校の教員 3 名が中心となって企画運営をし、大学生がそのサポートのみ

を行う形となってしまった。

- そもそも大通高校のラウンドテーブルという位置付けではないものの、参加者は大通高校の教員が大半を占める状態であり、もっと外部を活用した実行委員会を立ち上げる必要があるとも感じる。
- 例えば、教職を目指す大学生に企画運営を任せ、自らもそのテーブルに就くことができれば、教員養成の視点からも非常に有効であり、教員養成系の大学と連携した取組へ発展させていくことも可能になる。
- 奈良県で開催されているラウンドテーブルでは、若手の教員（30代）が企画しているが、自ら進んで実行委員となり、企画に関わっている。そのプロセス自体が結果として自身の研修のような効果をあげている。
- 本市の教育委員会（研修担当課）が教員の資質向上のための研修としてこの企画を活用することも可能なのではないだろうか。
- 中堅研修を受ける年代に差し掛かる教員がコミュニティのようにつながる機会として設定し、その教員たちが自分たちの企画により開催することを通して、各校の教員集団の質をさらに高いものにしていく取組になると良いと思う。
- 社会に開かれた学校の実現に向け、学校外の方との連携の場として有意義な機会を教員だけでなく様々な機関の方たちと作り上げ、分科会などの在り方を検討しても良い。
- 今年度、市立高校コンシェルジュ2名が配置されたが、コンシェルジュが橋渡し役になり、教員と外部をつなぐことができれば理想的かも知れない。
- コンシェルジュの配置が大阪府のようにNPOとしての組織とするなど、多くの費用が調達できるようなになれば、さらにその可能性は広がると思う。
- 教員側の参加者を増やしていくための方策も考える必要がある。
- 開催時期についても、昨年度は、各市立高校から生徒が参加できるよう3月に開催したところ、生徒のみならず、他校からも多くの教員が参加申込を行ってくれた。これは、自校の生徒が参加することで、開催の周知が予想以上に図れたこともあると思うが、あらゆる人が参加し易い時期はどの時期なのかを検討することは課題である。
- 教育委員会の研修など、事業として権威付けすることも可能だが、強制では効果が薄いとも感じる。
- ラウンドテーブルは面白い部分と新たな発見がある部分など、他の研修などとは異なっている。
- 教員の資質向上にもつながるもので、今後も継続・発展させられるよう運営の仕方を含め、さらに考えていきたい。
- そのためにもルーティンとなる部分の運営方法については、マニュアルのようなものを作成し、継承していくことが効果的だと思われる。
- 今回の開催記録からマニュアル化に向けて準備を進めている。次回の推進委員会に向け、た

たき台を作成するので、協議をお願いしたい。

- 続いて IB ワークショップに支援員を活用した状況について報告をお願いする。
- 今年度のワークショップは、約 60 名が参加した。以前、本事業の研究で作成した運営マニュアルを活用し、新たな支援員により運営協力をいただいたが、スムーズに運営することができた。
- 今回の実施状況を踏まえ、改善点等について継続して検討していきたい。

(2) 今後の取組についての説明と協議

- 外国籍の教員と日本の教員が同一の学校で教育活動を進めていく場合、それぞれの文化の違いにより多くの課題が生じると考えられる。
- その内容は、教員間の仕事に対する考え方の違いや教育理念など様々だが、その他にも、日本で生活する上での日常生活に係ることなどに支援するため、FAQ の作成を本研究では行うことを計画に掲げている。
- 本市では、JET プログラムによる ALT を対象としたガイドブックのようなものがあり、一部は特別免許取得者や GEA などにも参考になるが、両者は ALT とは異なるものであることから、より実状に適したものにすることが必要がある。
- 今回は、実際に着任している外国籍教員及び GEA の教員の困りなどについて、前回、ディクセット委員に協力いただき聞き取りした内容に加え、さらに個別の調査を行い、その解決に向けた指南書としての FAQ を作成していきたい。
- 12 月までの期間の勤務経験上生じた悩みや困りなどをまとめ、その解決方法について協議し、その結果、示すべき内容を決定していく。
- 次回の推進委員会で原案を示すので、協議を進めていただきたい。その際には、英語で表記したものと日本語で表記したものの両方を作成し、完成したものを日本の先生方にも配布することで共有を図っていきたい。
- 外国籍の先生方がどんな考えをもっているかを日本の先生方が知ること自体も困りを解決するだけでなく、協働の視点からも今後の重要な方策になると思われる。
- メンターを導入した支援では、日本でより長い生活経験をもつ外国籍教員などが見つければ、メンターとして協力していただけるよう場の設定を行っていきたい。
- ディクセット委員は、かつて特別非常勤講師を務め、現在は常勤講師となられており、長く日本での生活や教壇に立つ経験をもっておられることから、他の外国籍の方々にとってメンターといっても良いかも知れないと思うがいかがか。
- 確かに他の先生方から相談を受ける機会は多いが、それでもまだ自分自身に戸惑いなどがあり、その相談への対応が正しいかどうかと考えてしまうこともある。
- 日本に精通した方に協力してもらえれば良いが、なかなか頻繁に対応してくれるような人材はそう見つかるものでもない。
- 市内の私立高校には外国籍の先生で長く勤務している方がいるので、まずは、その方たちに

打診し、懇談会形式で相談にのってもらえる機会を設定してはどうか。

- その上で、さらに次の方策があれば検討することでどうだろうか。
- 有効な手段となる可能性が高いと感じる。まずは、依頼できる人材の確保と実際の開催日程の調整に入ることでよろしいか。
- 具体的な開催日や内容が決定次第委員の皆さんにお伝えしたい。

4. その他（連絡）

（１）メンターとの懇談会の詳細及び FAQ のたたき台については、後日改めて各委員にメールにて連絡。

（２）次回の委員会日程について

次回委員会は 12 月末または 1 月中旬までの期間で調整。

7. 閉会

以上

平成 29 年度 第 3 回市立高校外部の専門人材活用推進委員会 議事録

日 時	平成 30 年 2 月 21 日（水）10:00～12:00
場 所	札幌開成中等教育学校 会議室 1
参加者	相沢副委員長、西野委員、岩本委員、富田委員、ディクセット委員、松田委員 小林係長、幸丸係長、

1. 開会

2. 教育委員会挨拶

3. 調査研究に係る取組の実施状況及び今後について

（1）事業の進捗状況報告と今後に向けた協議

- 教員研修としての I B ワークショップ運営支援とマニュアルの活用については別紙参照。支援員のおかげで運営を担当しなくてよかったことから開成中等の教員もワークショップに参加することができた。
- 外国籍教員を対象としたメンターとの懇談会については、同じ経験をしている人の悩みを聞いたという点では、有意義であったと感じている。
- しかし、各校ごとに悩みには違いがあるので、今現在抱えている問題をすぐに解決できるという効果はないことも分かった。継続的な取組としてもあまり効果は得られないのではないかと感じている。
- 外国籍教員同士が、それぞれの話を聞いて同一の困りを共有したり、これまでに解決してきた経験を伝え合うといった互いに支え合う集団を作ることができるとよいのではないかと。
- 本事業での計画通り、メンターの導入を試みたが、人材の発掘が難しく、今年度は配置を実現することはできなかった。
- その理由としても、メンターを担える人材というのは、言語を話せるだけではなく、外国籍の方の気持ちを理解でき、なおかつ教育にも精通していなければならない。
- 今回は、当初から外部人材としての登用を考えてきたが、実は外部からではなく、内部での調達の方がその学校の実状を適確に把握しながらサポートできるのではないかと思う。
- 具体的には各校の英語の教員がメンター的な役割を果たしていくことができればベストである。ALT などに対しては、各校で年齢の近い英語の教員が自然にその役割を果たしている。
- ただし、教員の中からメンター的な役割を担うこととした場合には、その教員の通常業務に加え、新たにメンターとしての負担が確実に増えるので、その部分を補えるよう、メンターとしてではなく、その教員の負担軽減のための時間講師等を配置し、支援していく必要があるのではないかと。

- 人事異動等が生じた場合にもメンター的な役割を担う教員を持続的に確保していくためには、後継者を育成していくことが重要であり、これは組織で取り組まなければ解決できない問題でもあると考えられる。
- F A Q作成のために外国籍の教員にアンケートの回答をお願いしているが、現在返答待ちの状態である。F A Qが困りを抱える外国籍教員にとって有効であれば、来年度以降活用していきたい。
- 外国籍教員だけに視点を置くのではなく、日本人の教員にも外国籍教員の抱えている違和感を伝えて理解を得ることにも大きな意味があるのではないかと考えている。そういう意味ではメンターとの講演会は日本人の教員にも参加してもらい聞いてもらった方が良かったのかもしれない。
- 市立高校コンシェルジュについては、その役割を少しずつではあるが、学校現場や個々の教員に理解してもらっていると感じている。
- 実績としては総合的な学習の時間や主権者教育、防災教育、絵本読み聞かせ等の場面での講師の紹介依頼があり、要望にあった人材を講師として紹介した。
- 他には、生徒のコミュニケーションスキルを高めるための取組として、大通高校の教育活動の一環として行った TRPG 体験会の開催にも関与した。大通高校の 14 名に加え、開成中等からも 4 名が参加してくれたが、時間が経つにつれ、参加生徒の様子が、どんどん交流できるようになり、とても効果的な取組だったと感じている。
- コンシェルジュの活用をもっと効果的にするには、各校のあらゆる場面とコンシェルジュとをつなぐパイプ役としての専門人材が校内に位置付ける必要があるのではないかと考えている。
- 現在は各校に応援してくれる教員はいるが、個人的な繋がりが強く、このままでは長続きしないことが予想される。各高校内にコンシェルジュとの接続担当者の存在が望まれる。
- 将来的には外部人材と教員を繋ぐ、内部の専門人材を作っていくことになるのではないかと考えている。
- 生涯学習センターとコンシェルジュの連携も重要である。コンシェルジュが生涯学習センターに講師を紹介することもできるのではないかと考えている。
- 今年度開設された市立高校ポータルサイトでの情報発信など、コンシェルジュの役割としては、今後さらに広報の仕事が大きくなっていくと考えられる。
- コンシェルジュを設置できたことは大きな成果であり、この経験を踏まえて次の事業に繋げたい。
- ラウンドテーブルは、今年度、支援員の中心的存在として協力いただいた山本さんに手伝っていただき、マニュアル作成を実現することができた。
- 前回の会議でもお伝えしたが、今年度は、支援者として大学生に協力してもらうことで、教員の負担を軽減することができたが、同時に大学生にできることには限界があることが分かった。
- ラウンドテーブルは大通高校のためだけに実施しているものではないが、会場も実行委員も大通高校が担っており、他校の教員の受ける「大通高校の研修」というイメージを払拭できていないことから、他校の参加者は未だ少ない状況にある。
- 農業体験のアニマドロー、まちなか職業体験などでは、運営のパッケージができているので、外部に広めていくことは可能になっている。これらと同様の形にもっていくことができれば、他校

に運営主体を回すこともできるのではないか。

- 例えば、運営を当番校制にするなど形式的になってしまうとそれ自体が負担として感じられてしまうため、効果的ではない。
- 教育委員会が教員の資質向上を図るための研修としてラウンドテーブルを主催することはできないか。
- 例えば教育委員会が主催して中堅研修のような形にしてみると、参加する教員は義務的に捉えてしまい、モチベーションが上がらず期待する成果が得られないのではないだろうか。
- 教育委員会が主催できなくてもコンソーシアムのようなフレームを作り、大学も関わる形で運営をしていけばよいかもしれない。それを教育委員会の委託などにより予算をつけるという形が実現可能なのではないか。
- 教員養成系の大学はラウンドテーブルのようなものに興味があると考えられ、連携について相談することで実現する可能性は高いと思う。
- 研修担当課が今年度始めた教員志望の大学生を対象として開催した「夢道場」などの場面で大学生の実行委員を募り、大学側が中心となり運営するフレームを作れると、高校の教員にとってもフラットな位置づけになるので参加しやすい。その取組を教育委員会が後援するのはどうだろうか。
- 道教育大は小中学校教員養成が主たる役割であり、卒業後は小・中学校で採用になる者が多い。他県のラウンドテーブルでも小・中学校の教員が多く参加している状況があり、札幌でも高校だけではなく異校種の教員が共に研鑽する場として発展させられる可能性も生まれてくる。
- 今後はラウンドテーブルに焦点をしばって研究することもできるのではないか。

(2) 事業報告書の取りまとめについて

- 今年度の取組の対象となった項目について、関わりの深い方に原稿の依頼をさせていただいているのでそれを基に今年度の成果について報告書としてまとめさせていただく。
- 現在作成中の事業成果報告書について意見等がある場合は適宜事務局に寄せていただきたい。

4. 閉会

以上

していたが、コンシェルジュからは、それに限定せず、広く教職員にも開かれていることが必要であるとの意見をいただいたことから、次の内容を加えることとした。

各校からの連絡・相談、さらに先生方からの連絡・相談も受け付けていますので、授業や各校の活動の中で外部の方と連携したい、自校の取組について広く紹介したいなど、電話またはメールにて積極的に相談してください。

札幌市の方針に合致する次期学習指導要領の基本理念として、「社会に開かれた教育課程」つまり、教育課程を通して、現実の社会との関わりの中で豊かな学びを実現するとともに、学校教育を学校内に閉じることなく、その目指すところを社会と共有・連携しながら実現することが重要である。

このことは、現在の教育現場において、かつてないほどに浸透してきていると感じており、学校内の教育に、講師や支援者として様々な分野の人材が関わったり、生徒が社会に出て、多くの社会人と活動を展開するなど全ての学校種において社会とのつながりは深まっている。

しかし、教員の日常における教育活動は、それぞれが専門とする教科指導が中心となるとともに、あらゆる場面での生徒への対応、部活指導など多忙を極めていることから、地域の人的・物的資源の活用や社会教育との連携強化にまでは至らない傾向がある。また社会の人材とのつながりの度合いも教員個々による差が大きいものと思われる。

「市立高校コンシェルジュ」は、そうした現状の打開につなげ、教員の資質のさらなる向上に寄与することを期待し、制度としてスタートすることとした。

（２）高校現場と市立高校コンシェルジュの相互理解

市立高校コンシェルジュの最初の活動として、市立高校８校への訪問と聞き取りを実施。４月から５月上旬にかけて、コンシェルジュが８校を訪問し、主に校長・副校長・教頭と懇談を行った結果、それぞれの学校において、どのような分野の外部人材とどのように関わってきたのか、また市立高校コンシェルジュに対する教員の理解や期待の度合いについて、学校間による温度差があることが把握できた。

訪問によって得られた、学校の現状やコンシェルジュへの期待についての意見の概要は、以下のとおりである。

A校・・・外部から人材を呼ぶだけではなく、多くの生徒が外に出て、外部の人と関わる経験が必要であり、その部分の支援に期待したい。障がいのある生徒の受け入れなど教員の意識は変わってきている。

B校・・・身体障がいを持つ生徒への外部支援（障がいの度合いに合わせて、段階的に就労につなげるなど）の継続的強化が課題。学校と社会の双方向の利益実現に期待したい。

- C 校・・・外部講師による授業が安定している。小・中・高連携のボランティア活動を盛んに行っている。外部との関わりで困難を感じることは、現状ではあまりない。
- D 校・・・各学校でなければならないことに加え、一層地域・社会とのつながりが大切になると考えている。学校だけではできないことの支援に期待したい。
「相談の窓口」「ボランティアの窓口」「総合的な学習の時間」の外部人材活用の支援などに期待したい。
- E 校・・・コンシェルジュには得た情報をそのまま提供いただく方が良いかもしれない
「・・・ああこんなものがあるんだね。」教育活動の各過程でニーズが出てくる。
「実学」として活用できる最新の情報がほしい。
- F 校・・・外部と連携した課題探究的授業が多い。外とのつながりを担っている教師への同僚からの理解・協力がある。生徒は何がしたいのか、こんなことはできないのかといった視点から、様々な大人と繋がるための方法かなどをコンシェルジュに相談して情報をもらえる可能性に期待している。
- G 校・・・生徒が地域の小学校に出向き、出前授業をするなど地域とのつながりが深い。
「総合的な学習の時間」等において、まず学校が年間計画を立案し、時期や必要となる講師について、学校とコンシェルジュが一緒に考えられれば良い。
- H 校・・・環境に関する教育で大学との連携が深い。学校としての継続的な取組をコンシェルジュに支援してもらえればありがたい。「総合的な学習の時間」も時々の学年で単発的内容が多く、こうした部分にもコンシェルジュが関わってもらえればと願う。

こうした現場の意見の聞き取りをベースに活動を始めたが、予想以上に教職員の市立高校コンシェルジュに対する理解や認知は進んでいない状況が窺えた。教職員の声として、「どのようなことをしてくれるのか」「何ができるのか具体的イメージが湧かない」「あまり必要性を感じない」などがあった。

そこで実際の活動と並行して、「校長会」、「副校長・教頭会」に留まらず、平成 16 年の札幌市立高校教育改革の時点から共通施策として位置付け、市立高校が長年実施している「各推進委員会」（各校の教員を委員とする全市立高校の協議組織）にコンシェルジュが出席し、教職員に直接語りかけ、活動内容の説明や現状の報告を行い、それに対する意見や質問をもらうこととした。出席する協議会は、特に外部との関わりの強いと考えられた「進路探究推進協議会」「特別活動推進協議会」「カウンセリング推進協議会」の三つとした。

また、教育活動の主体である生徒への周知も必要であると考え、8 校の生徒会役員およそ 80 名が一堂に会し協議する「生徒会リーダー交流会」（12 月：札幌市教育センター）にも参加。交流会での熱心な生徒の協議を傍聴・取材することができ、市立高校コンシェルジュの

存在を高校生に直接周知する機会を得ることができた。その場で、「生徒たちが外部と何らかのつながりをもとうとする際には、担当教職員を通じた“窓”がある」ことを伝えられた意義は大きい。

さらに、10月に「市立高校コンシェルジュだより」を市立高校全教職員に配付し、11月には、大通高校生の協力を得て、「繋がります」をキャッチコピーにポスターを制作、通年で各校に掲示することとした。



（３）学校と外部人材をつなぐ取組【重点的取組１】

市立高校コンシェルジュの最も基本的な取組は「学校と外部人材をつなぐマッチング機能」である。学校からの相談・依頼を受けて外部人材の選定及び接続したケースは、この１年間で７件。依頼の際の窓口となった内訳は、管理職３件、教員３件であった。

この件数に関する評価については、今後分析が必要と考えるが、これらのケースは「総合的な学習の時間」「通常の教科の授業」「学校設定科目」等における外部講師の依頼であった。

具体的には以下のとおり。

○清田高校「公民科一倫理」（６月依頼）

＜テーマ＞LGBT

＜内容＞人権問題をテーマとした授業。講師の話聞き、生徒が講師に対する質問や意見交換を行うアクティブ・ラーニング的授業

○清田高校「平成 30 年度宿泊研修」（９月依頼）

＜テーマ＞バイオに関する講話

○啓北商 学校設定科目「キャリアデザイン」（９月依頼）

＜テーマ＞職業観・勤労観を含めた講話

○大通高校 「総合的な学習の時間」（10月依頼）

＜テーマ＞ESD 教育の一環としての「防災教育」

○藻岩高校 「公民科一政治経済」（12月依頼）

＜テーマ＞18 歳選挙権に伴う主権者教育

○新川高校

＜内容＞「近隣小学校への読み聞かせボランティア（新川高校生およそ 40 名）に向けての講習会講師」（12月依頼）

○大通高校 「キャリア探究」

＜内容＞大通高校の「ミツバチプロジェクト」と製菓メーカーとの合同プロジェクト

これらの依頼の中には、講師を限定しているものもあり、また、分野が特殊で、教師個人が的確な人選に至るには困難なものも含まれていた。しかし、コンシェルジュの幅広い人脈により、短時間で依頼された全ての講師を確定し、つなぐことができた。終了したものについては各校担当者から感謝の報告をいただいている。

このほか、学校からの依頼ではないが、大通高校を会場として札幌市生涯学習センターが開講している「札幌市民カレッジ」に大通高校生が受講し、高校の単位として認定することができる学社融合講座に係り、講師発掘などにおいて、生涯学習センターと連携を図ることができた。間接的ではあるが、既存の取組として行われている高校と外部機関などの関わりにおいても、その外部団体の支援という新たな視点をもつことの有用性という観点からも、今後の活動の在り方の参考となる機会を与えていただいた。

（４）情報発信・取材の取組【重点的取組２】

①ポータルサイトの開設

市立高校コンシェルジュの二つめの大きな役割は、広報活動である。それは一方通行ではなく、学校と社会の双方向の情報発信である。生徒にとって有益な外部からの情報は、学校内ではなかなか得ることが難しい。また、学校の教育活動を社会へ発信することも、教員のみの方では限定的である。市立高校コンシェルジュはその機能を担う存在である。

しかし、公立学校では、自治体のセキュリティポリシーが定められた中での情報発信となり、制約が多いという難点がある。しかし地域社会の一部として存在し、生徒たちが将来の社会の担い手となるため、目の前に立ちはだかる壁を少しでも低くしたいというコンシェルジュの願いから、フェイスブックページを含めた推進を要望され、準備を進めてきた。

そうした要望を踏まえ、市立高校の教育活動や高校生向けのイベント・講座など各種情報を発信する「札幌市立高校ポータルサイト」と「札幌市立高校フェイスブックページ」を平成 29 年 12 月 6 日に開設することができた。

②学校の教育活動への取材と発信

コンシェルジュの年度当初からの取組として、各高校において、翌月に予定されている「外部と関連する教育的活動・イベント」の集約・把握を実施。依頼先は、各校の校長としていたが、その後、副校長・教頭により定期的対応していただけるようになった。学校側にとって業務負担になることも想定されたが、年度当初に各校が発行する「年間計画」では外部との連携の関わるものが網羅されないことが多く、年度途中に入る予定もあることから、コンシェルジュが取材・発信した内容は有効なものとなった。

今年度、市立高校コンシェルジュとしての情報発信を含め、取材・見学した主な教育活動は以下のとおりであり、ポータルサイト上に随時掲載している。

- 平岸高校三者会議（６月）
- 東海大学建学 75 周年公開講座
 - ・開成・啓北・大通 3 校が地域連携活動の成果報告（北海道東海大学 ７月）
- みなみの杜高等支援学校 カフェ開設へ（７月）
- 札幌ラウンドテーブル（大通 ８月）
- IB ワークショップ（開成 ８月）
- 平岸高校デザインアートコース・・・人と動物の共生（平岸 札幌市地下歩行空間 ９月）
- まちなか職業体験（大通 札幌中心街 ９月）
- 「地球のステージ」（世界の難民・貧困問題）（清田 ９月）
- キャリア探究 アニマドーレ「弁当開発チーム」の活動（開成 10 月）
- TRPG 体験会（コミュニケーション能力育成）（大通 11 月 2 月）
- 環境講座プレゼン発表（藻岩 11 月）
- ICT 研究発表（開成 11 月）
- さっぽろ村ラジオ訪問・出演（さっぽろ村ラジオ 大通メディア局 11 月）
- TED×Sapporo プレゼン発表（開成生徒・大通生徒）（産業振興センター 12 月）
- 市立 8 校 生徒会リーダー交流会（札幌市教育センター 12 月）
- キャリア探究「おさかな教室」（大通 1 月）
- さっぽろ雪まつり市立 8 校ボランティア（つどーむ 1 月）
- 市立高校プレゼン実行委員会（大通 12 月・1 月・3 月）
- 市立高校プレゼン大会（地下歩道空間 3 月）

一方、コンシェルジュの一人が主宰する「札幌人図鑑」に＜高校教師カテゴリー＞が設けられ、高校教師、魅力的な取組を続けている市立高校教師、“がんばる”市立高校教師の収録が本人の同意のもとに行われた。平岸高校・大通高校・旭丘高校・啓北商業高校で勤務する計 5 人の教師のそれぞれの“ストーリー”がポータルサイト上に公開された。

個々の教師の日常の教育活動の実際は、学校外に伝わる機会は少なく、認知されにくい状況の中、広く社会に発信されたことの意義は大きい。学校や教師への信頼を高める一助にもなり得る取組であると感じている。

また他の教師にとっても同僚教師の姿を通して今後の励みとなることが期待される。

さらに、この取組は、“がんばる”生徒たちも目が向けられ、平岸高校の数学同好会長の男子生徒（２年生）、開成中等教育学校で「トビタテ留学 JAPAN」に採用され、海外留学を果たした女子生徒（５年次生）も収録・紹介された。

③外部情報の学校への発信

一方、学校や生徒たちへの社会・外部からの情報も積極的に発信している。

「是非生徒たちに参加を呼びかけたいもの」「イベント情報」について、教育委員会との協議を経て、ポータルサイト上に掲載した。今年度、発信した主な情報は以下のとおりである。

- ・高校生対象ブートキャンプ
- ・Thinkyo 北海道 「今日、教育を think する」
- ・オリンピック・パラリンピックを考える—学生アイデアコンテスト
- ・全道高等学校軽音楽新人大会

（５）「市立高校コンシェルジュ」２年目に向けて ～成果と課題～

制度として４月にスタートし、発足後しばらくは、その存在をいかに知ってもらうか、取り組む内容への理解や信頼をどのように得てゆくのか課題となった。認知については様々な手段を通じてほぼ達成されたと考えられるが、実際の業務については、コンシェルジュ自身もまだまだ試行錯誤の日々で、「これがコンシェルジュの姿」と言い得るものが明確になるまでには至っていない。

２年目については、学校にとって、コンシェルジュがより身近なものとして機能し、分かりやすい姿になるための一つの方法として、教員の負担となることを避けつつ、各校にコンシェルジュと直接やりとりができる窓口的な教員を指定する方法が有効かもしれない。

【重点的課題１】の「外部とのつながり」については、学校からの依頼件数が７件に留まった。

このことは、例えば、新川高校で医療関係の進学に対応した外部講師による「ディベート授業」が継続されているように、各市立高校が安定した外部人材とのつながりに時間をかけながら積み上げてきた背景があると思われる。しかし、今後、「アクティブ・ラーニング」などの教育を推進していく場面では、新たな分野の外部人材の必要性が高まることも予想され、そのための『実績バンク』のようなシステムも重要な役割となる可能性がある。

実際の活動としては【重点的課題２】「情報の発信」の方が中心となった感がある。１年目の成果として、ポータルサイトの立ち上げが実現したが、あまり事前の議論をせずに、まず、実際の「取材」や「発信」を優先させることとした。２年目に向けては、何を取材対象とし、目的を明確にしてどのように発信していくのか、もう少ししっかりとした議論が必要であると考えている。

１年間の活動を通じて、常にコンシェルジュに意識していただいたことは、「学校社会・教育の現場」と、いわゆる「一般の社会・民間の社会」との間にある“壁”の高さや厚さといったものである。

「公教育のあるべき姿」という暗黙の了解のもとに、「学校社会・教育の現場」では、知らず知らずのうちに「一般の社会・民間の社会」との連携が困難であるといった思いを抱いている。具体的な例としては、「外部講師」を依頼する際の「謝礼」がある。学校が可能とする「謝

礼」には限りがある。また、特定の企業との関りにおいても学校現場としては利害関係に注意しなければならない。「文化・風土」の違いといったものもあり、今年度はそうした点を確認しながらの連携が多かった。

しかし、どちらが正しいということではなく、2年目についても、1年目の動きを踏まえ、双方がさらに「折り合いをつけ」「理解しあえる」よう工夫をすること、このことが引き続きコンシェルジュに求められている。

一方「市立高校コンシェルジュ」は「制度化」されたというが、実態は教育委員会による雇用の形態とはしていない。このことから、強制力が弱く、コンシェルジュ自身の思いや意思により自由に動き得る存在としているところは、良さと脆弱さが同居していると感じている。また、本業となる仕事に従事しながら、その他にコンシェルジュを担う場合、重点的取組を越えてさらに広く活動できる保証はない。

現在の市立高校には「札幌ラウンドテーブル」や「アニマドーレ発表会」など、今後対象校・対象生徒を広げていく可能性のある有意義な教員研修や授業の取組が行われている。

これらの取組は、これまでは基本的に限定的な教員の尽力により実施されてきたが、組織的に継続的に運営・発展させていくためには、「市立高校コンシェルジュ」の活動も含め、ノウハウを蓄積し、新たな市立高校支援の仕組みが必要になることも考えられる。2年目の「市立高校コンシェルジュ」には、こうしたことを展望した活動も検討する必要がある。

2 市立高校コンシェルジュの支援による学社融合講座

○学社融合講座とは

札幌市生涯学習センター（以下、「生涯学習センター」という。）が、「さっぽろ市民カレッジ（以下、「市民カレッジ」という。）」として企画・運営している年間約 300 講座の内、学校教育と社会教育・生涯教育の融合という形で計画段階から生涯学習センターと市立札幌大通高等学校（以下、「大通高校」という。）が連携し、大通高校を会場として学社融合講座を約 30 講座開講している。大通高校の生徒は、この学社融合講座を無料で受講することができ、そこでの学びは「学校外の学修」として、基準を満たせば卒業単位として認定することとしている。

学社融合講座の趣旨は、「生徒が市民カレッジを受講することにより、「学ぶ」楽しさや卒業後の社会教育に対する意識向上、さらには、次世代を担う有為な人材の育成と市民の生涯学習活動の推進を図るため」としている。（財団法人札幌市生涯学習振興財団と市立札幌大通高等学校学社融合事業に関する覚書より）

従って、生涯学習センターでは、講座受講対象者が一般市民と大通高校の生徒であることを考慮し、上記のねらいを達成するに相応しい内容を企画するだけでなく、学社融合の趣旨を理解し、適任となる講師や補助講師を発掘しなければならない。

生涯学習センターで実施される一般市民対象の市民カレッジでは、各講座において、その成果や内容の改善に向けたアンケートを実施し、毎年、内容や講師の教え方、新しい企画につなげており、これまで一定の成果を挙げてきた。

一方、高校生に対しては、一般市民を対象とした講座ごとのアンケートに加え、3年に一度をめぐりに全生徒と全教員に対して、どんな講座を望むかというアンケート調査を実施し、その結果を次年度の講座の企画の参考としている。

○市立高校コンシェルジュによる支援の可能性

<新しい情報の獲得>

平成 29 年度、札幌市教育委員会が配置した市立高校コンシェルジュ（以下、「コンシェルジュ」という。）により、各学校から聞き取った様々な状況を深く知ることができるようになった。10 月には「市立高校コンシェルジュだより」が発行され、大通高校の状況についても生涯学習センターのアンケートとは異なる視点での状況を知ることができた。定時制高校である大通高校の様々な生徒の状況や教員の状況などについて、生涯学習センター単独では通常知り得ない情報の提供を受けられる状況になっている。

<今年度の成果>

コンシェルジュとの連携によって、今年度、特に成果として得られたことは、後期に開講

した幾つかの講座での講師の対応の変化である。

①講座：「今日からはじめる太極拳」

毎年開講している講座で、一般市民の参加者が多い講座であるが、ややもすると簡単に遅刻欠席を重ねる高校生も見受けられていたが、今年度は、講座の開始の前に直接講師に高校生の状況についての情報を伝え、十分に理解いただいた。

まず、講座開始直後の準備体操の時点で、講師から高校生を中心とした声掛け、中間の時点で一般市民と内容を変えて、少し動きのある動作を教えることによって高校生の興味関心を高める工夫が見受けられた。講座の終了時には、一人一人と対面して感想を聞くなど、雑談をしながら励ましを続けていただいた。その結果、これまでになく高校生の出席率が高まり、「もっと先生と話したかった」という生徒の声も聞かれた。



②講座：「～仕事に役立つ！～モノと時間の整理整頓術」と「～仕事に役立つ！～モノとお金の整理整頓術」

①と同様に講師に先に情報を伝えた結果、一般市民と高校生の座席を隣り合わせにした意見交換の時間を設定し、自分の意見を発表する場面をたくさん設定していただいた。その結果、毎回生徒と市民の会話が生まれて雑談もできるようになり、グループの意見交換などでは高校生が上手にまとめて発表するなど高校生にも自信が生まれた様子であった。



<講師、補助講師の発掘におけるコーディネーターの重要性>

生涯学習センターの市民カレッジ講師の発掘については、職員が日頃、様々な情報の入手や候補者が講師を務める研修会等への実際の参加など、適任者を見つけて依頼することが多い。市民カレッジの中には「ご近所先生企画講座」と読んでおり、一般市民が得意分野の講師となる講座があるが、その講師を選ぶ際の説明会、面談及び研修をそれぞれ2回ずつ受けた上で、講師としてデビューするシステムである。教員免許が無くても（教員と協力して）立派に講座を成立させており、中には連続15回開講となっている講師も存在している。

学社の講師は、人伝に情報を得て選ぶ場合や一般の市民カレッジの講師から発掘することが多いが、最近では「ご近所先生」から見付けるケースが増えている。高校生の参加を喜んでくれる方が多いことが理由にあげられる。また、生涯学習センターには「ちえりあ

市民講師バンク（以下、「バンク」という。）があり、現在 300 名が登録しており、「ご近所先生」は全てバンクに登録されるシステムとなっている。これにより、学社の講師の選定の場面では、ちえりあのバンクと接続するコーディネーターの役割が大変重要となる。

また講師だけではなく、補助講師についても発掘するには様々なところに存在する講師バンクなどとの連携が大切であり、コーディネーターの役割が重要となる。

以下の表（網掛けの部分）は、今年度後期に補助講師として、生涯学習センターが札幌国際プラザや他の高校、大学の人材バンクとの連携によって補助講師を発掘できた講座である。（写真③④⑤）



<ニーズの理解と各人材バンクとの連携におけるコーディネートの結果>

日 程	講 座 内 容
① 10/11	アイヌ文化を学ぶということ
② 10/18	現地学習 札幌とアイヌ文化 1（清華亭）
③ 10/25	現地学習 札幌とアイヌ文化 2（北大植物園）
④ 11/1	アイヌ民族の歴史①（明治時代以前）
⑤ 11/8	アイヌ民族の歴史②（明治時代以降）
⑥ 11/15	アイヌの衣服（材料・文様など）
⑦ 11/22	現代のアイヌ文化と今後の課題
⑧ 12/6	北海道の国際化の歴史～お雇い外国人について～
⑨ 12/13	外国籍市民との交流～お互いの困りを理解する～
⑩ 12/20	貿易ゲームで知る世界と日本～国と国のつながりを体験～
⑪ 1/17	やさしい日本語の練習 1 短文での練習
⑫ 1/24	やさしい日本語の練習 1 温泉のマナー
⑬ 1/31	やさしい英語の練習 1 発音のポイント、話しかけ、道案内
⑭ 2/7	やさしい英語の練習 1 自己紹介 札幌紹介
⑮ 2/28	やさしいことばでの練習 SOS の場面：地震

⑨ 札幌在住または学んでいる外国籍の方を招き、それぞれの方から国の紹介と日本での

生活の仕方の発表を行っていただいた。

- ⑩ 学生団体「結」のメンバーがファシリテーターの役割を担当、受講者は、グループに分かれ、各々が日本、アメリカ、ブラジル、ガーナ、エチオピアの国民として自国の産物による貿易によって自国の利益をどのように獲得するかというゲームを行った。
- ⑪～⑮ 札幌在住または日本語を学んでいる外国籍の方々がグループに入って実習の手伝いを協力していただいた。

<その効果>

- ⑨ 札幌での暮らしの状況を外国籍の方と直接聞くことができたことや、話すことができたことで、互いの距離が縮まり、普段着で接することが大切であることや、やさしい日本語で話すことの大切さを感じられたことから共生のヒントが得られた。
- ⑩ 受講者の感想においては、「仮想貿易を経験したことで、世界と日本という意識が実感できた。世界の貧困に悩む国々に対して日本ができることは何かということまで考えられるようになった」という意見も寄せられた。グループワークによって、同じ国でも意見の違いがあり、それをまとめようとする力が必要であることも理解できた。
- ⑪～⑮ 講師のファシリテートや補助講師の陽気な人柄によって受講者の距離が近くなり、活発な講座となって、実に楽しかったという感想が寄せられた。

<学社の講師が担当教員へ与えた研修効果>

学社融合の講座には担当教諭が配置され、講座の準備や片付け、講座中の生徒に対する指導を中心に関わっている。後期講座終了後の担当教諭（大通高校）へのアンケートの項目において、講座の様子から参考になったことを聞き、以下の回答が得られた。

- ・歌の講座：呼吸法や発声法を学ぶことができ、自分の持っている部活動生徒に応用できた。
- ・PCの講座：丁寧で分かりやすい説明の仕方、受講者に対する言葉遣い、周到的な準備と見やすいテキストなど参考になることが多かった。
- ・点字の講座：毎回受講者の興味を引くような内容を考えてくれている。
- ・太極拳の講座：講師2人の教え方が実に息があっていて、無駄がない。また常に受講者に声掛けをしていて受講者に常に笑顔で接しながら興味や関心を持続させているのを参考にしたい。
- ・片付けの講座：パワポと配布資料がよく工夫されていた。先生や大人の誘導で生徒がしっかりと意見交換しているのが新鮮だった。誘導の仕方が参考になった。

学社融合の意義は受講者同士の世代間の学びの交流にあるが、それだけに止まらず講師の指導法や受講者の様子を見ることによって、教員が学ぶことも多いことが明らかになった。

＜今後のコンシェルジュの活用＞

次年度以降の学社融合の講座内容や講師・補助講師等の発掘を考えたとき、生涯学習センターでのこれまでアンケート調査などの動きに加えて、コンシェルジュからの情報、或いはコンシェルジュそのものがコーディネーターになることも期待できる。コンシェルジュの役割がより明確になっていくにつれて、大通高校だけに止まらぬ学社融合講座の構築も視野に入れることが可能になると考えられる。

3 IB ワークショップ運営マニュアルと外部支援員活用の効果

(1) 研究の概要

○ 課題認識

ワークショップ開催には受講者の取りまとめや、当日の受付など様々な運営業務が発生するが、これらの業務を受講者である教員が全て担ってしまうと研修に専念することができない。

○ 活動の目的

前年度作成した「運営マニュアル」をもとにワークショップの運営業務を外部支援員が担う形で開催する。また新たなノウハウの蓄積を図る。このことにより、受講者である教員は研修に専念することができ、受講する教員の教師力の向上を図ることが期待できる。

○ 活動の方法

「運営マニュアル」を活用してワークショップの運営を行う組織として実行委員会を組織し、その事務局に外部支援員が入り、実際のワークショップ運営の全てを実践した。

○ 活動対象

平成 29 年度は、次の通り実施した。

・受講者

札幌開成中等教育学校教員

他の市立小中高教員

札幌市以外の学校教員

札幌開成中等教育学校生徒の保護者等

・開催日程

平成 29 年 8 月 8 日（火）～ 8 月 10 日（水）

・開催ワークショップの種類

①DP 導入ワークショップ（教員・保護者等）

②CAS ワークショップ（教員）

③TOK ワークショップ（教員）

④デザインワークショップ（教員）

⑤体育ワークショップ（教員）

○ 活動から見てきた現状

外部支援者を活用して運営する実行委員会形式によるワークショップの開催を「運営マニュアル」を活用して実施することができた。また、新たに得られたノウハウを「運営マニュアル」の改訂版に付け加えることができ、次年度以降の開催に活用できると思

われる。

(2) 活動のポイント

①外部支援員による運営支援

前年度同様、ワークショップの運営に外部支援員が携わり、事前準備や当日の運営などを支援することで、教員がワークショップに専念できる環境をつくることができた。

(3) 取組の成果

- ・前年度同様、外部支援員が運営を支援することにより、教員がワークショップに専念することができていた。
- ・今回、弁当や飲料などを一つの業者に一括して手配した。それにより複数の業者に手配する際の煩雑さを回避し、提供内容のクオリティを上げることが目的であったが、この変更は参加者やワークショップリーダーにも大変好評であった。この方式は次年度以降にも継続すべきだと思われる。

(4) 今後の課題

①外部支援員に関すること

- ワークショップ運営に協力してくれる外部支援員の輪を広げること

次年度以降も、ワークショップ運営に協力してもらう外部支援員を募る際には、ワークショップの開催日程上、平日の業務が可能なことや、教育に対して興味・関心を持っていることが必要である。外部支援員に対しては、協力を得るときのみ関わるのではなく、ワークショップ運営が終了した後も継続的に連絡を取り合うことで人脈を大切にし、外部支援員の輪を広げていくべきである。

- 外部支援者に英語での対応が求められる場合があること

英語しか話すことのできない受講者あるいはワークショップリーダーがいた場合、受講申込のメール対応やワークショップ当日の対応を英語で行う必要があり、外部支援員のうちできれば一人は日常会話が可能な程度の英語力があることが望ましい。

②運営に関すること

札幌市立学校以外の受講者を受け入れるためには、事務局は受講者からの問合せ（英語対応も含む）や、札幌市と会場までのアクセスマップの作成とその送付、当日のタクシーの手配などを行う必要がある。そのためには、外部支援員の増員も考慮に入れた事務局機能の強化を引き続き図らなければならない。

◎活動報告

教員研修としてのIBワークショップ運営支援とマニュアルの活用

活動の概要

◆課題認識

・IBワークショップの開催には運営業務が発生するが、受講する教員が担うと研修に専念できない。
・前年度に作成した運営マニュアルを実際に活用する。

◆活動の目的

・前年度作成した運営マニュアルをもとに、外部支援員を活用してIBワークショップを運営し、受講する教員が研修に専念できる環境を整えること。

◆活動の方法

・IBワークショップ運営のための実行委員会を組織して、その事務局に外部支援員及び運営マニュアルを活用し、実際の運営を行う。

◆活動の対象

・IB公式ワークショップ参加者
札幌開成中等教育学校教員
他の札幌市立学校教員
札幌市外の学校教員
札幌開成中等教育学校保護者等

◆活動から見えてきた現状

・外部支援員を活用する実行委員会形式によるIBワークショップ運営を今年度も行うことができた。
・「運営マニュアル」を活用した運営支援を行うことができた。

活動のポイントと成果

◆活動のポイント

①外部支援員による運営支援

・前年度同様、IBワークショップの運営に外部支援員が携わり、支援することで教員がワークショップに集中できる環境をつくる。

②運営マニュアルの活用

・前年度作成した運営マニュアルを活用することで、より円滑な運営を目指す。

◆活動の成果

・前年度同様、外部支援員の運営支援により、教員がワークショップに専念できていた。
・運営マニュアルを活用して運営支援を行うことができた。
また、今回新しく得られたノウハウを運営マニュアルの改訂版に付け加えることができた。

今後の課題

◆外部支援員に関すること

・引き続きワークショップ運営に協力してくれる外部支援員の輪を広げること。
・外部支援員に英語での対応が求められる。(外国人ワークショップリーダーへの対応など)

◆運営に関すること

・札幌市以外からの参加希望者の受講を円滑にするため、事務局機能の強化が必要。

4 札幌ラウンドテーブルへの外部支援員の配置と運営マニュアルの作成

(1) 札幌ラウンドテーブルの取組

○ ラウンドテーブルとは

ラウンドテーブルは、それぞれの地域や職場で自分たちが試行錯誤を繰り返しながら取り組んできた実践の展開をじっくり語り、聞き取り、学び合う場である。参加者が、自らの実践を跡づけ、その省察を踏まえて実践を編み出し、地域や職場・学校と多様な領域の参加者が実践を通じて学び合う協働体（コミュニティ）の形成につなげていく。その中で一人一人が、省察的で主体的な実践者としての力を培っていくことができる。

2日間にわたって開催した本研究会は、テーマ毎の分科会をはじめ、小グループでの実践の展開を聞き合う時間をメインとしている。

各グループにいるファシリテーターの進行で、実践報告者の歩みをじっくり聴き取り、心に残る場面、言葉、表情、行為。その時々を感じたこと等を振り返る中で見えてきたつながりを、グループの話し合いの中で発見していくといったプロセスを通じて、参加者は自らの実践と照らし合わせたり、新たな「気づき」をもらい合ったりしながら、次の一歩につなげている。

○ 平成 29 年度「2017 札幌ラウンドテーブル」の開催

平成 29 年 8 月 5 日（土）、6 日（日）に市立札幌大通高校を会場として実施された。

参加者総数 62 名

○ 札幌でのラウンドテーブル開催の経緯とその趣旨

もともとラウンドテーブルは、福井大学教職大学院が 2000 年から年 2 回ずつ開催し続けている「実践し省察するコミュニティ・実践研究福井ラウンドテーブル」のことを指し、これに参加した札幌大通高校の教員たちが、この形態の学びであれば様々な研究へとつながるという可能性を感じ、平成 27 年度に札幌で初めて開催を試みたものである。この「2015 札幌ラウンドテーブル」での交流協議の到達点は、日常的教育実践を教科指導に限定せず、部活動、ホームルーム、総合的学習の時間、校外活動、図書室の取組、困難を抱えた生徒への支援、生徒会活動、地域や大学との連携など、様々な学習活動を利用した、意図を持った生徒への働きかけ全てを教育実践と捉えるべきであるという認識をもったことである。

また、福井大学で行われた高校生と大学生のクロスセッションに参加した札幌市立高校の生徒も、この交流を広げたいと考え、「札幌市立高校 3 校合同ラウンドテーブル」を開催し、高校生と大人たちの学びの場を創出した。

今回の調査研究の対象とした札幌での３年目の開催となるラウンドテーブルでは、教科指導に留まらず、全ての教育実践を組織化して生徒の人生構築に寄与しうるものを追究する点に教師の専門性があることをうけ、実践の行方を遠くまで鳥瞰し、今後の教育現場が進む方向性について深く省察を加え、各人の糧にすることをねらいとして実施した。

また、分科会Ａは、「**外部資源と共同的に進める教育のため、学校組織は何を必要とするのか**」をテーマとして、経済・社会・文化といった地域の様々な活動と生徒とを結ぶことで得られる教育の成果を実効性の高いものとするためには、教育の側にもそれなりの用意または条件整備が必要であることに着目し、校内外組織、カリキュラム等の様々な面を考察することとした。

分科会Ｂでは、「**子供の貧困**」に**教育ができること～複数分野の連携でかなう構想～**をテーマとして、ひょうたん型などとも言われる世帯収入の二極化が進行すると、低所得の問題は、子の就学困難や社会接続困難に直結し、そこに障がいの問題が加われば問題はいっそう深刻になることに着目し、これに対処するために模索されている取組を共有することのより、取組の利点と課題について考えることとした。

これら二つの分科会を実施し、参加者から得た意見からも充実した機会となったことが把握できたとともに好評を得ることができた。

（２） 取組の成果と課題

今回は、これまでの札幌大通高校の教員研修という枠組みを外し、市立高校関係者をはじめ、日ごろから市立高校教育において連携協力していただいている方々に広く参加を募って開催した。さらに、昨年度の反省を生かし、外部支援員の活用による運営を試みた。

これまで、事務局といっても実質３名の教員で運営していたため、今年度協力していただいた支援員の意欲・資質ともに高いものがあり、当日庶務が大きく軽減され、運営に当たっていた教員も研修に集中することができた。ただし、今年度においては、企画段階から支援員に事務局として加わっていただく体制をとれなかったため、支援員が何を支援するかのイメージがしばらく曖昧だった。

今後は、ラウンドテーブルの効果を考えると、市立高校教育改革とも紐づけ、各市立高校の教員が参加することで、互いの学校の取組やその際の外部人材活用のノウハウを共有する機会にもなると考えられる。また、地域の情報が集まるプラットフォームとしても活用したい。

なお、今後の札幌市の教育を支える若者（教員志望の学生等）の学びの場とするためにも、大学との連携を検討していきたい。

(3) 参加者の感想

今年度のラウンドテーブル参加者の振り返りにおいて得られた意見を抜粋して紹介する。

「札幌ラウンドテーブルは昨年に引き続いて2回目の参加です。毎度、様々な実践に取り組む方と出会えて勉強になります。同時に、自分の実践を振り返るきっかけにもなります。テーマも趣向が凝らされていて、工夫を感じます。」

奈良女子大学附属中等教育学校 教諭

「私はコンシェルジュとしての参加で、先生でも生徒でもなく、PTA 寄りの目線で参加をしました。現場の方達はどんな思いで生徒と向き合い、これからの教育に必要なものは何かを知りたい期待感がありました。」

最初の自己紹介で様々な背景の方が集まっている事が分かり、スタートから熱量が高かった。個人的な収穫は、教員の本音が聞けたこと。外から見ると、話題性のある賞賛されるような出来事にどうしても注目が集まる。それゆえ、関わる優秀な生徒や担当の先生の話ばかり取り上げられがちだが、ある先生がボソッと行った「教員はフォワードの先生ばかりじゃない。それがいい。」という言葉が今も心に残っている。職員室にはフォワードからディフェンスまでいるのいい。なぜなら生徒もそうだから。フォワードの先生を見ると、カッコいいな・凄いなと思うけれど、人数の多い少ないに関係なく、なかなか目の見ない、地味な生徒に寄り添うのが自分は得意。そう語ってくれた参加者の先生の話に感銘を受け、先生への見方や接し方が自分自身変わったと思う。お題から議論を深め、結論に導くものではなく、ただただ話す・聞く、という時間だからこそ出てくる、素朴な日常も、業界が違ふととても新鮮。学びの多い、楽しい時間でした。ランチタイムは外に出ず、お弁当が食べられたのは時間も短縮でき、他グループの方と交流もできよかったと思う。道外や大学生の参加が楽しく良かったが、一方で地元の先生の参加が少なく、そこだけ残念でした。次回があれば、是非参加させていただきたいです。」

市立高校コンシェルジュ

「社会との接点を深く取って、教育機会の中に組み入れている教育実践者の多さに感銘を受けました。都道府県を問わず、自分自身のコネクションや実践例について、今回を機に共有もしくは紹介し、すぐに実行したいと感じた。このような機会が水平展開することで、都道府県を越えた受講相互乗り入れや、受講する高校生が入学したい高等教育機関の設置など未来構想に発展すると実感した。」

相愛大学人文学部 講師

「札幌ラウンドテーブルは、札幌の教育に関わる方々が幅広く集い、互いの実践を交流しながらその価値や展望を学び合えた点が良かったと思います。また、道外からの参加も、地域をこえて互いの取組に光を照らし合うという点で大切であると実感しました。札幌での開催も少しずつ積み重ねてきていますが、今後の継続が計画されているならば、どのような運営が持続可能であるのかを検討する段階に入っていると感じます。また、ラウンドテーブル自体をどのように創り、その後、その成果をどのように振り返っていくかという一連のプロセスの質は、当日の実戦交流の質に跳ね返っていくのだということも忘れてはなりません。ラウンドテーブルを目的化することなく、日々の実践をより豊かに展開していくための学び合うコミュニティ(手段)とし、そのコミュニティの編成自体を札幌に根付かせていくためにも、運営について、ひらかれた面白い議論を期待するとともに、道外からの協力を惜しみません。」

奈良佐保短期大学 講師

「報告者として自分の経験やそれに基づく思いや悩みなどを共有し、他の人の視点からの意見を聞く中で、経験を客観視することができ新しい発見がありました。また、同じ教育という分野で活動している人たちとの繋がりはその後も続くものになり、貴重な場に参加することができたと思います。」

北海道大学教育学部 学生

「本年度の札幌ラウンドは、大通高校の問題意識が全面に表れていたように感じる。その問題意識とは、生徒を取り巻く貧困の問題である。文化的な貧困や経済的な貧困などを抱えた生徒に対して、大通高校の実践者たちがどのように関わり、取り組んだのか聞くことができた。なかでも驚いたのは生徒が学ぶ環境を、札幌市の事業所と協働し、整えようとする教員の試みである。高校を卒業後、生徒が経済的に自立し社会人として生きていくために、地域の事業所と提携を結び、徒弟制度を意識した職業訓練実習のような場を構築されていた。

中学校教諭として働く私は、教室で国語の授業を行い、生徒が卒業するまでの間だけ見守り自立を支える。就職し自立する生徒像を射程に捉え、実践できていなかった。日々の学校での営みや教師の試みが、生徒の就職や自立の一助を担っているのかと問い直すようになった。教室の学びが、教室だけでしか成立しない学びになっていないかと省察するようになった。札幌ラウンドを通して、「教師としての私」を見つめる新たな観点を手に入れることができた。

運営について感じ考えたことは、2016年度と2017年度の札幌ラウンドに参加させてもらい、札幌ラウンドの変容がうかがえた。一つめは、札幌ラウンドが校内研修として、大通高校の教職員に受け入れられつつあると感じた。各テーブルに入る大通高校の教職員が増え、ラウンドを通して懸命に実践の意味付けを試みようとする姿があった。教職員が学ぶために研修などを

外部に依頼するのではなく、教職員自身で学びを生み出そうとする姿が印象的であった。教職員同士の学び合う文化が醸成されつつある。二つめは札幌ラウンドの特色である。各地域でラウンドが開かれ、多くの実践が語られている。しかし、その中でも札幌ラウンドの語りには「地域連携」が際立つ。札幌市内の事業所と共に生徒の自立を支援する、学びの機会・環境を整える試みだ。もしかすると連携という言葉でおさまるものではないのかもしれない。この札幌ラウンドの語りの特色は大通高校の教育課程の特色と言い換えられるだろう。私自身、微力ながら奈良ラウンドに関わらせてもらっているが、「奈良ラウンドの特色とは？」と問い直す機会をいただいた。」

奈良県生駒市立光明中学校 教諭

5 外国人講師に対するメンターによる支援及びFAQの作成

(1) 札幌市の状況

平成27年4月に開校した市立札幌開成中等教育学校は、開校当初から国際バカロレアの認定を目指しており、平成29年3月に同バカロレア機構のミドルイヤープログラム(MYP)の認定を受け、現在、ディプロマプログラム(DP)の認定を目指している。

このことから、特別免許を授与した外国籍の期限付き常勤講師を配置するとともに、特別免許取得を目指すグローバル人材育成推進員(GEA)として、非常勤講師を導入している。

今年度の研究では、これらの外国人講師が来日後、日本の教育現場及び日常生活で抱える悩みや問題を解決または緩和しながらサポートするため、メンターの役割を担う人材による支援及び自ら活用できるFAQの作成をすることとした。

しかしながら、メンターとなる人材の発掘などが困難であったことから、スポット的な試みとなるが、現在、長期にわたり札幌の私立高校に勤務し、経験豊富な外国人教師を招き、札幌市の特別免許取得者及びGEAが抱える悩みなどについての講演及び懇談会を開催することとした。

(2) 私立高校に勤務する外国人教師による講演

今年度、12月に開催した当日の概要及び今後の課題として得られた内容は以下の通りである。

○ 開催のねらい

市立札幌開成中等教育学校に勤務する外国籍のスタッフが、日本の学校で勤務経験が豊富な外国籍の教員から体験談を聞くことにより、日本人スタッフと共に働くことで起こる違和感やすぐにわかり合えないコミュニケーションや考え方の違いからくる働きにくさを軽減し、安心して勤務する上でのヒントを得る。

①講師紹介

- ・米国出身で、立命館慶祥高校に勤めて15年となる。最初は時間講師から始まり、正式な常勤教諭となる。
- ・契約状況

立命館慶祥には時間講師と常勤教諭の2種類の雇用形態があり、3年契約を上限としていたが、5年契約へと変更した。これは、優秀な人材をできるだけ長く契約できるようにということであった。講師自身は常勤教諭として勤務している。

②講演の内容

- ・経験談

契約した当時は英語科の日本人スタッフが授業計画を立て、教材を作成していた。あくまでもアシスタントとして英語の授業に入っていた。その後、5年契約となるタイミングで教諭となり、日本人と同様の業務を期待されることとなった。まず、英語のカリキュラム開発の仕事を担当した。これにより、日本の

学校教育で求められている英語教育がどのようなものであるかを知ることができた。その後、学級担任として働くことになったが、最も大変だったのが生活指導であった。また、日本人教員と同様のことが求められたことにより、大変苦慮したことが幾つかあった。

- ・職員会議等

会議が2時間ということが普通であった。実際の内容を理解できるようになるには何年もかかったが、会議に出ないということはできなかった。とても大変だった。また、管理職との面談も難しかった。

- ・保護者との面談

ホームルーム担任としての保護者面談は大変だった。選択科目や受験のこと等、日本の教育システムをしっかりと把握していなければ保護者の質問には答えられない。できれば日本人の担任がどのように面談しているかを事前に同席するなどして経験しておくことが必要であった。

- ・土曜授業

土曜日は半日授業があるのと、行事も入ることがあるが、自分のプライベートを優先しにくい状況である。また、部活動についてもその分の手当ては無いといことも理解し難い。とは言え、これが日本の現状だったり、私学のやり方であり、自分なりに折り合いをつけなくてはやっていけない。

- ・生活指導（生徒指導）

外国人として生徒指導をすることは、言葉の問題もあり非常に難しい。英語でも日本語でも指導する場面は真剣勝負が大切。時間講師やALTの立場ならいいが、常勤講師やホームルーム担任であるなら、ここでしっかりとやらなければいけない。学年の日本人スタッフと連携することも必要だし、日常的に生徒達とコミュニケーションを積極的にとることで人間関係を構築しておくことが重要である。

- ・日本人教員との連携

できるだけチームで仕事をすることを心がける。一人でできることは別にしても、協働する意識を持つことが大切。また、教科や分掌の仕事は既にある記録やこれまでのやり方を参考にするとともに、発展させていく気持ちを持って取り組むことが外国人スタッフには求められていると考える。

(3) 今後の課題

今回の講演及び懇談で得られたことは以下のとおりである。

- ・今回の講演会は、外国人講師が自分の立場を客観的に見ることができるという意味では良かった。
- ・ただ、外国人講師が今抱えている問題を解決するものとしては疑問がある。
- ・開成中等教育学校では、外国人講師の状況は安定してきているので、定期的に相談会を開く必要はない。
- ・学校での仕事の開始時にはメンターがいると助かる。
- ・メンターとしては、学校内部の人で学校の状況も踏まえて細かい相談ができる人物だと良い。
- ・学校の内部を理解し、外国人、日本人教師双方との調整ができるコーディネーターが必要であり、その養成ができると良い。
- ・例えば英語の教員がその役割を担う方法があるが、その教員の負担が大きくなってしまう。

(4) F A Qの作成

もう一つの研究項目として、外国人講師の困りを支援するためのF A Qの作成を計画していたことから、札幌開成中等教育学校に勤務しているG E Aを対象として、現在抱えている困りを聞き取るとともに、これまで札幌市のA L T等への対応でも必要と考えられてきた内容を整理し、F A Qを作成することができた。

今後は、このF A Qを外国人講師に配布し、活用してもらい、このF A Qに掲載していない内容で困りのあることについての聞き取りを継続し、さらに質の高いものにしていきたいと考えている。

G E Aを対象として実施した聞き取りから得られた意見のうち、G E Aに応募する段階で抱えていた問題については、下記の通りであり、F A Qの冊子の内容に反映させている。

FAQ for the application for GEA

This FAQ would be helpful for the person who apply for GEA position.

The purpose of the FAQ is to resolve the question about their application.

Q1. What is the required level of Japanese language?

A. You need the level that can interview with recruitment stuff in Japanese.

Q.2 I can't write personal essay in Japanese. How can I do for it?

A. Please write it in Japanese in principle.

Q3. Do I have to apply for the work VISA?

A. You don't have to apply for it when you apply for GEA position. After your application success, you will be going to apply for the work VISA.

Q4. Is there anything required for my work experience?

A. You need to experience the work in the education-related fields.

Q5. How the recruitment interview is done?

A. If you are living in Sapporo city, please visit our school.

If you are living in out of Sapporo city or foreign country, it's possible to interview on Skype.

Q6. Regarding a Criminal Record Background (CRB) check, what is required when I obtain it?

A. A Criminal Record Background (CRB) check is, in principle, required from your home country. In case you are living / working over a long period in another country, please ask to

the recruitment team.

Q7. When my application success, how I prepare for new life in Sapporo city?

A. The school helps you follow the necessary procedure in the ward office, make your residence card and open your bank account.

Q8. After my application success, where do I accommodate?

A. The school will look for suitable accommodation where you can walk to school for you. Or it's possible that you decide to rent elsewhere by yourself, in that case, you have to be responsible to make arrangements yourself.

Q9. Will the school cover the insurance?

A. GEAs will be covered by two types of insurance: medical and work.
Please ask to recruitment team for more information.

Q10. Can I have a side job?

A. No, you can't have any side job.

Q11. How to apply for annual leave?

A. Please consult with principal or vice-principal. If you feel under weather and you have a sick day, you should call them.

Q12. Are there any regulations about a sick leave?

A. Please refer to the relevant articles of the application guideline.

If you have any question about your application, please feel free to ask to the recruitment team.

【日本語訳】

GEA 応募のための FAQ

この FAQ は GEA に応募する方に役立ててもらおうと作られました。

この FAQ には GEA に応募する際の疑問を解消するという目的があります。

Q1. 日本語能力はどのくらい必要ですか？

- A. 日本語でインタビューできるくらいの日本語能力が必要です。
- Q2. パーソナルエッセイを日本語で書くことができません。どうしたら良いでしょうか？
- A. 原則的に日本語で書いてください。
- Q3. 就労ビザを申請する必要がありますか？
- A. 応募の時には申請する必要はありません。採用決定後に申請することになります。
- Q4. 職歴に求められることはありますか？
- A. 教育関連分野の仕事の経験が求められます。
- Q5. どのようにして面接は行われますか？
- A. 札幌市内に住んでいる場合は学校に来てください。札幌市外か外国に住んでいる場合はスカイプでの面接が可能です。
- Q6. 犯罪歴証明書を取得するときには何が求められますか？
- A. 原則的にあなたの母国でのものが求められます。あなたが長期間他の国で生活あるいは働いている場合は、採用チームにご連絡ください。
- Q7. 採用決定後、札幌での生活のためにどのように準備したらよいですか？
- A. 学校が区役所での必要な手続きや住基カードの申請、銀行口座の開設をお手伝いします。
- Q8. 採用決定後、どこに住んだらよいでしょうか？
- A. 学校まで徒歩圏内の最適な住居を学校が探します。自分で他の場所にすることも可能ですが、その場合は自分で調整しなければなりません。
- Q9. 学校では保険に入れますか？
- A. 2種類の保険、医療保険と雇用保険に入ることができます。
詳細は採用チームにお問い合わせください。
- Q10. 副業はできますか？
- A. いいえ、できません。
- Q11. 年休はどのように取得したらよいでしょうか？
- A. 校長か教頭に相談してください。
体調不良により欠勤する場合は、校長か教頭に電話しなければなりません。
- Q12. 病欠に関する決まりはありますか？
- A. 応募要項の関連項目を参照してください。

応募に関して何かご質問があれば、遠慮なく採用チームにお問い合わせください。

6 「教室で使えるグループワーク」を活用した研究協議会

(1) これまでの研究成果の活用

- 中学校・高等学校進路探究学習研究協議会における「教室で使えるグループワーク」の活用

昨年度、国から「総合的な教師力向上のための調査研究事業」の委託を受け、その調査研究の取組の一つである「IB公式ワークショップの成果発信検討ワーキング」において、その研究成果物となる小冊子「教室で使えるグループワーク」を作成している。この小冊子は、市立札幌開成中等教育学校の国際バカロレア教育プログラムにより実践された課題探究的な学習を他の市立学校においても活用できるよう、イラストを中心として生徒にも理解しやすい構成で、授業等の場面でグループワークの手法を用いる際に生じる様々な「困り」の状況について改善の方策を示したものである。

昨年の調査研究では、本小冊子を作成し、札幌市立学校に配布することはできたが、実際の活用場面の設定及び検証などは実践することはできなかった。

そこで、今年度の本事業においては、優秀な人材の確保や教師の指導力向上につながる研究が求められていることから、昨年の成果物である先の小冊子を教員の研修等の場面で実際に活用することにより、札幌市立学校の教員にとって今後の指導場面における参考となるよう機会を設けることとした。



図1 「教室で使えるグループワーク」

具体的には、本市の中学校と高等学校の教員を対象に「中学校及び高等学校における進路探究学習の在り方等に関する研究協議を行い、生徒一人一人が自分らしい生き方を実現するための資質・能力を育成する視点に立った教員の組織的・継続的な指導力の向上」をねらいとして毎年11月に開催している札幌市中学校・高等学校進路探究学習研究協議会をその機会として活用することとし、今年度の講師を引き受けていただいた国立教育政策研究所の立石慎治氏に「教室で使えるグループワーク」を用いた内容による協議会としていただくよう依頼することとした。

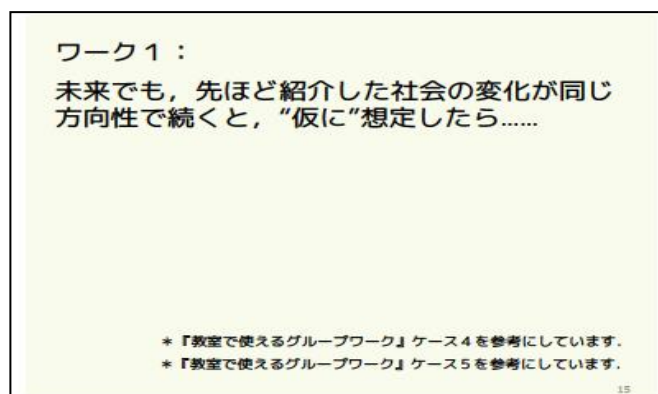


図2 研究協議会のスライドシート

すでに各市立学校には配布していたが、協議会当日の参加した48名の中学校及び高等学校の教員に小冊子を資料として配布するとともに、事前に講師と打ち合わせをし、テーマ「変化する社会を見据えて私たちにできることーアクティブ・ラーニングとの交差点ー」について、本小冊子の内容を効果的に挿入したプログラムを作成していただいた。

当日は、研究協議及び演習を行い、特に、演習については、グループワークを取り入れることを試みた時に直面する「困り」の場面を分類し、本小冊子における「ありがちなケース」として取り上げ、より良い方向へと導く過程を実際に体験する場面を作ったことで、参加者が授業の中で実際にグループワークを取り入れた際に、ファシリテーターとして適切に介入し、議論を促進して行く過程を理解できるプログラムとなった。また、本研究協議会は、中学校、高等学校、中等教育学校、特別支援学校から、初任者、中堅教員、管理職など様々な人材が参加して行われたが、本小冊子を活用することで、初めて会った参加者同士の意見交換も活発になり、研究協議としての内容も深まった。このことから、本小冊子はグループワークを含む研修を行う際に、本来の研修内容をさらに深めるためのツールとしても活用できることがわかった。

今後は、グループワークに関する研修に限らず、校内研修を含めた様々な場面で本冊子が活用できることについて、より広く周知していきたい。

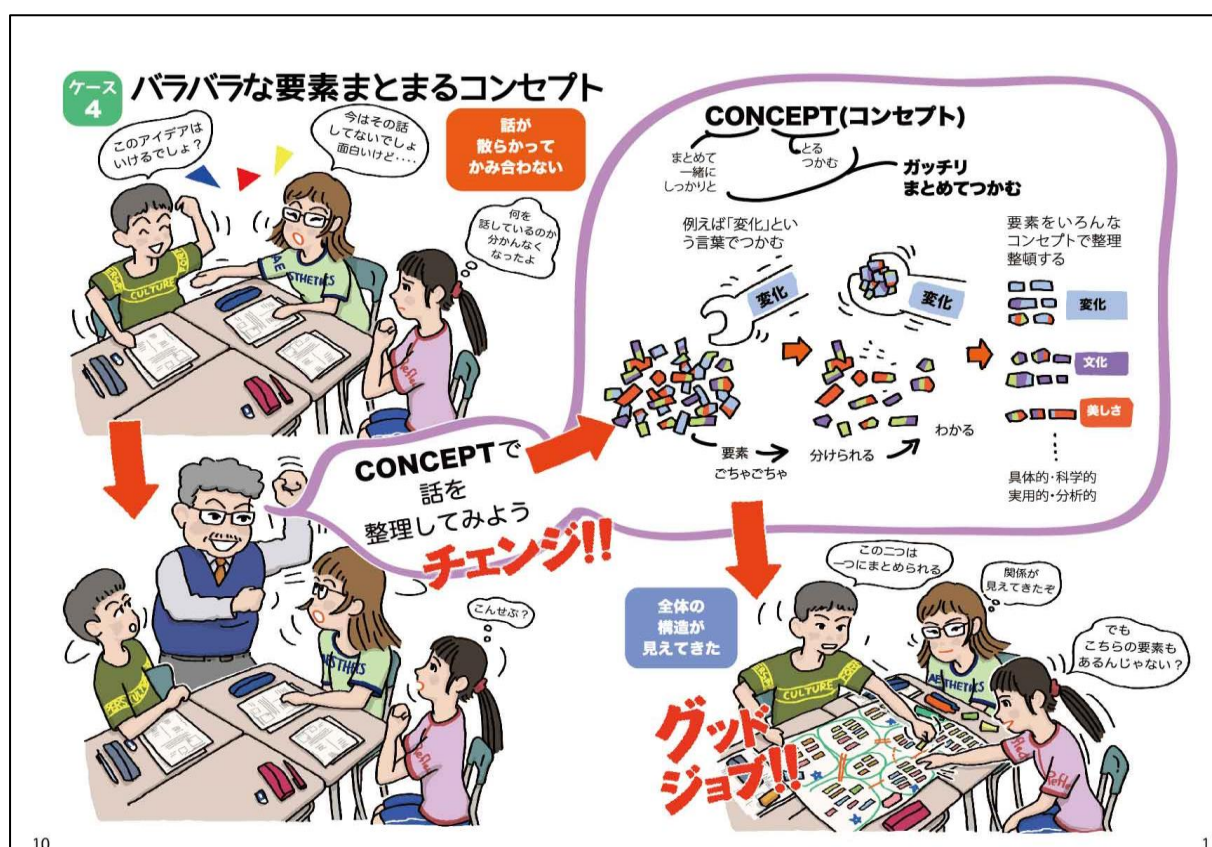
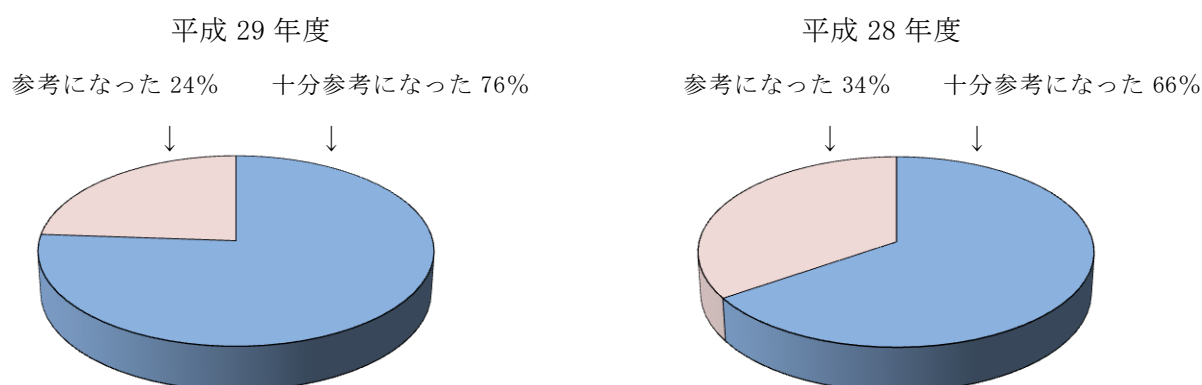


図3 「教室で使えるグループワーク」で例示される「ありがちなケース4」

協議会後には、参加者全員に対して本協議会の内容についてのアンケートを行った。図4では前年度行われたアンケートとの比較を示した。前年度とは、講師も内容も変更しているため、単純に比較はすることはできないが、協議会の内容を評価するアンケート項目①「本日の内容は参考になりましたか？」では、「十分参考になった」の回答者が前年度に比べて10%増加しており、本小冊子を用いた研修について、参加者が高い満足度を示していることがわかった。また、アンケート項目②「本日の内容を学校での指導に活用したいと思いますか？」では、「是非活用したい」の回答者が昨年度に比べて18%増加している。本小冊子の内容を活用して、実際にファシリテーションを体験できるプログラムを通して、多くの参加者が学校での授業に、グループワークの手法を活用したいと思ったことがわかる。

アンケート項目①「本日の内容は参考になりましたか？」



アンケート項目②「本日の内容を学校での指導に活用したいと思いますか？」

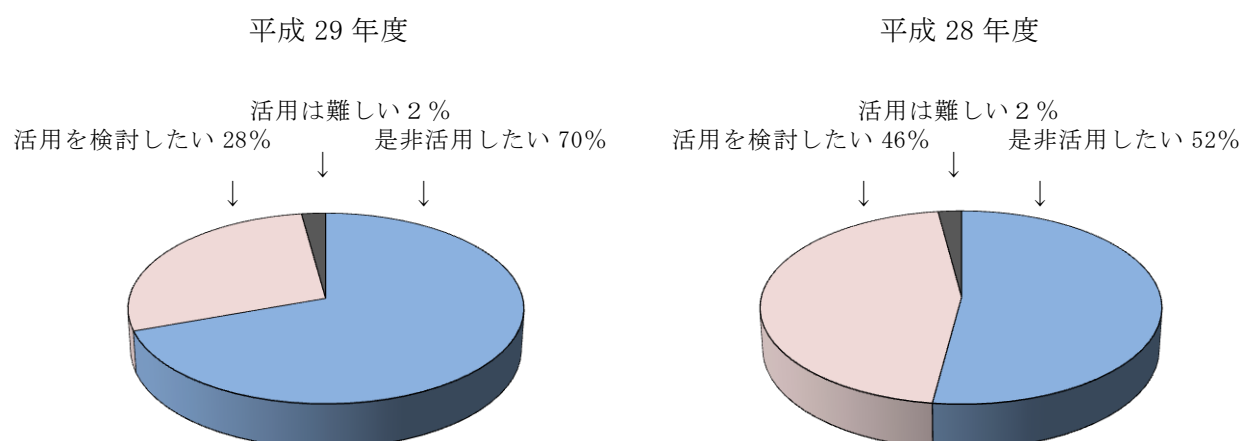


図 4 札幌市中学校・高等学校進路探究学習研究協議会アンケート結果年度比較

また、参加者アンケートでは、自由記述の欄にも本小冊子の内容を取り入れた内容についての肯定的な意見が目立った。以下に、その一部を転記する。

・ 10年後、20年後の日本をイメージした進路探究学習の視点を改めて考える事ができた。今までの教育では、フォローできないことが多くあると考えさせられた。グループワークでは、多くの交流をすることができ、多様な視点があることに気づかされた。演習の中では、まさに「ありがちなケース」の状況が発生し、その解決を体験することができました。

・ 予想していた講義とは全く違っていて、とても刺激になりました。ワークショップを通して、この講義で何を伝えようとしているのかを深く考えさせられ、また、実際にグループワークを体験することで、ファシリテーションの技術を身に付けることができたと感じます。配布された冊子は今後のアクティブ・ラーニングに向けた資料として、大変参考になりました。

・ いろいろな方々の考えを知ることができた。さらに、今日以降の実践に役立つこと、ヒントをいただいた。自分が経験することで、生徒の活動の予測が立てやすくなりました。「教室で使えるグループワーク」、大いに役立ちました。

・ 他校種の先生方と探究的な学習方法を学ぶことができました。進路を選択する中で、どのような選択も対応しうる力を身に付けるためには、協働、学び合いなどを取り入れながら知識を定着させて行かなければならないことがよく分かりました。今日学んだグループワークの手法を今後に生かし、機会を見つけて実践するとともに、これからも協働学習について、広く視野を持って勉強していきたいと思います。

今年度の札幌市中学校・高等学校進路探究学習研究協議会は、講師と事前に打ち合わせをすることで、小冊子「教室で使えるグループワーク」をより効果的な方法で活用できた事例である。今後も、適切な機会に本小冊子を活用することで、教員の実践的な指導力向上を図っていききたい。

Ⅲ 調査研究のまとめ

札幌市教育委員会では、平成26～28年度に「総合的な教師力向上のための調査研究事業」の委託を受け、外部人材を活用した教員の指導力の向上についての調査研究を発展させてきた。

これら3年間の調査研究の成果は、確実に本市の高等学校の教育充実のために生かし、平成29年度に策定した「札幌市立高校教育改革方針」の重点項目の基盤となっている。具体的には、各校の教育活動に外部の専門人材等を活用する際に、外部人材と学校を接続する役割を担う「市立高校コンシェルジュ」を導入し、併せて、研究の成果物となった「教室で使えるグループワーク」（小冊子）を各学校に配付し、授業で活用できるようにしてきた。

そこで、今年度は、これまでの成果の活用及び課題として残った内容の研究を進めることとした。

一つ目に、「市立高校コンシェルジュ」の人材活用ノウハウの普及を図るため、コンシェルジュが個々の教員との接点を持ち、ともに考える機会を増やすこと、さらに、市立高校が合同で行う様々な活動に関わり、各校独自に取り組んでいる特色ある教育活動の場面にも足を運び、各校との関係を構築してきた。

ただし、コンシェルジュに高いスキルや広い人脈があっても、各学校の教育活動が外部との連携による効果を実感できなければ、次の発展につながらないため、さらに今後、関わりを深めることを継続していく。併せて、これからもコンシェルジュへの依頼により対応した各校の教育活動を本市が新たに開設した「市立高校ポータルサイト」に公開し続けるなど、全ての市立高校および個々の教員が自校に止まらない活動の意義を考え、評価する力の養成につなげるとともに新たな発想を生み出しながら社会と連携した様々な教育活動の動機付けとしていきたい。

二つ目に、外国人講師に対する支援では、当初の想定通り様々な悩みを抱えていることがヒアリングの中から把握することができた。メンターとなる人的支援を計画していたが、人材の発掘が思うように進まず、日本の私立高校に長期間勤務している経験豊富な外国人の方に講演・懇談の講師を依頼した。残念ながら、今年度は、スポット的な実施に止まったが、参加した外国人講師からは、とても好評な機会となった。本研究の経験から、校内で共に勤務する教員の中からメンター養成を行うことが有効であるのではないかという考えを得ることができ、今後、組織的な検討を進めていきたいと考えている。併せて、本研究において、FAQハンドブックを作成することができたことから、その内容について、外国人講師の意見などをさらに参考としながら、改訂を進めていきたい。

三つ目に、IB公式ワークショップやラウンドテーブルなど外部連携を必要とする研修等の運営マニュアルの作成と活用については、いずれも有効であり、教員の研修への専念と円滑な研修体制の構築を実現した。特に、ラウンドテーブルについては、研修自体が有効であると感じており、運営をマニュアル化できたことにより、研修そのものの拡大の可能性を見出すことができた。ただし、ここでも連携する外部人材の人選などが重要である。

本調査研究の結果、当初想定していた通りにならないこともあったが、どの研究も今後の市立高校の教育活動の充実につながる成果が得られた。しかしながら、新たな課題も見えてきており、今後もさらなる改善・発展に向けた検討を継続していくことが求められる。

本報告書は、文部科学省の初等中等教育振興事業委託費による委託事業として、札幌市教育委員会が実施した平成 29 年度「教員の養成・採用・研修の一体的改革推進事業」の成果を取りまとめたものです。

したがって、本報告書の複製、転載、引用等には文部科学省の承認手続が必要です。